産業観光
きりゅう紀行 104

桐生を愛した作家偲ぶ 緑に囲まれ『美しい街』称える

南川潤文学碑

桐生を愛し桐生に没した作家・南川潤の文学碑が吾妻公園にある。遊歩道の脇に建てられた御影石の碑には『何かしら故郷のようにこの街を愛する心になっている』と、南川の作品『窓ひらく季節』の一節が刻まれる。

南川潤は大正２年、東京日本橋に生まれた。慶応大学文学部では英文学を専攻、予科在学中から本格的な創作活動を始め、昭和 12 年に『掌の性』で第 2 回三田文学賞を受賞した。翌 13年にも『風俗十日』で同賞を連続受賞し、文芸界に鮮烈なデビューを果たす。都会的センスにあふれた軽快なタッチで青年男女の恋愛模様を描き、さわやかな学生作家として注目を集めた南川であったが、折からの戦時体制下には合致せず、反体制派の作家として認識されることになる。

敗色が濃くなってきた昭和19年の春、夫人・ツネの郷里である桐生に疎開。戦後は自由な日々が戻り、元々速筆だった南川は旺盛な創作活動を続ける一方、上毛文芸会や緑地帯文芸会などを指導し、地方文化の向上にも尽力した。

昭和27年に坂口安吾が桐生に来たのも、南川を頼ってのことだった。心臓病という不治の病を抱えながら、いつも颯爽として明るい顔を保ち、南川のいる席はどこでも“他に得がたい楽しさ”が漂ったという。

昭和30年９月22日、脳血栓のため菱町の自宅庭で倒れて 43 歳で永眠した。作品に風格と落ち着きが溶け合い、これからという時に惜しまれる早逝だった。

昭和52年、市民有志らは南川潤を偲び、南川がこよなく愛した吾妻公園内にこの文学碑を建立した。また、東京からの玄関口・東武新桐生駅には、桐生東ライオンズクラブにより南川を偲ぶ碑が建てられている。そこには同じく『窓ひらく季節』から、『私は東京からの来訪者にこのまちを自慢する…』で始まる一節が標される。

『窓ひらく季節』は桐生の学生たちとの交流を描いた風俗小説。『私が再び東京へ舞い戻るのはいつのことだろう。いや、私は多分このまゝ、この美しい街の住人になり終わるだろう。』と終盤に語る南川。そこには疎開や病の悲哀を越えて、幸福への意思があふれる美しい街とその暮らしを愛おしむ南川の姿がにじむ。

【吾妻公園】●場所／桐生市宮本町3–9